

玉の内風祭獅子舞

玉の内の風祭獅子舞については、昭和二十二年八月十五日付で玉の内青年文化部による縁起書が作成されている。

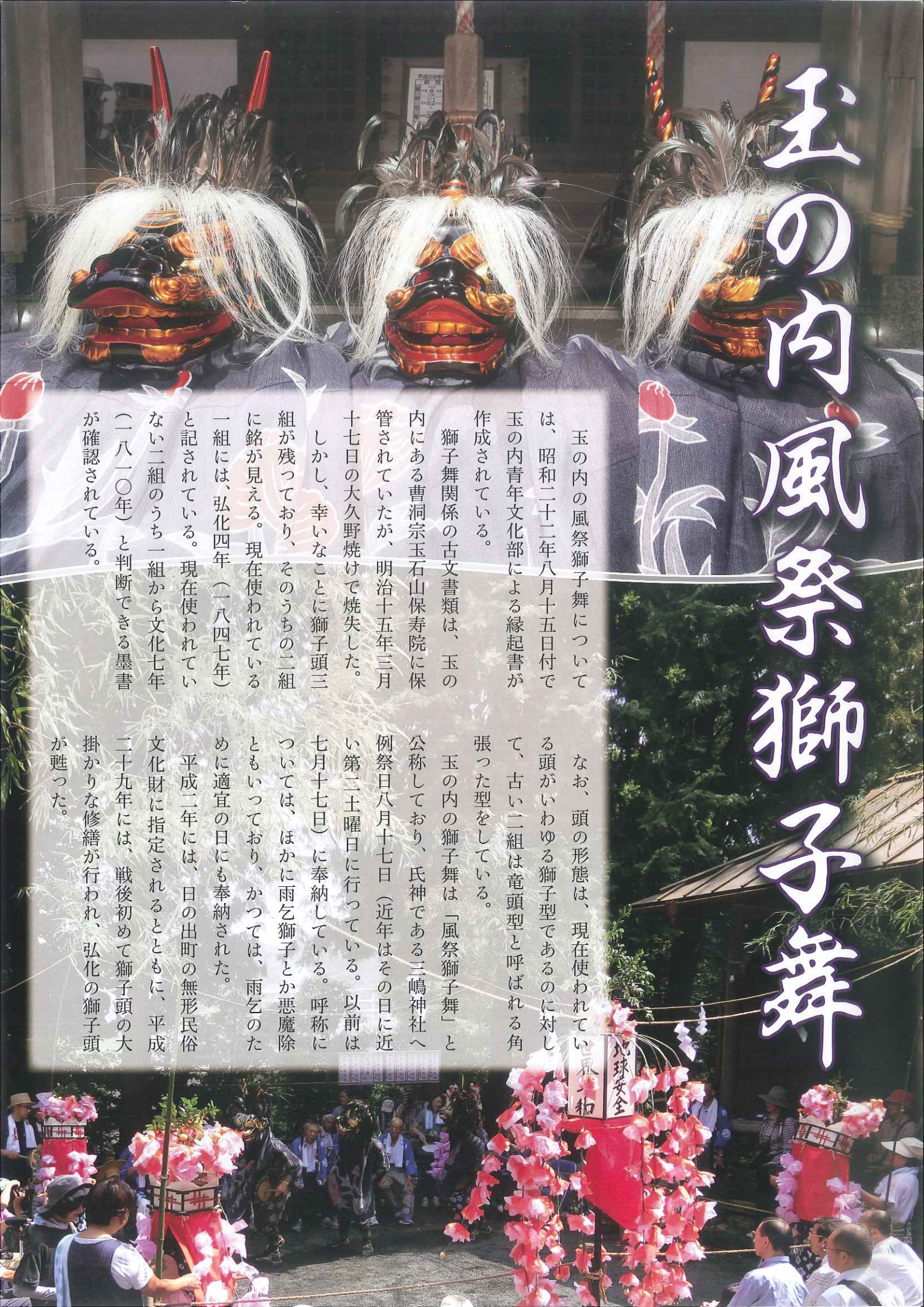
獅子舞関係の古文書類は、玉の内にある曹洞宗玉石山保寿院に保管されていたが、明治十五年三月十七日の大久野焼けて焼失した。

しかし、幸いなことに獅子頭三組が残っており、そのうちの二組に銘が見える。現在使われている一組には、弘化四年（一八四七年）と記されている。現在使われていない二組のうち一組から文化七年（一八一〇年）と判断できる墨書が確認されている。

なお、頭の形態は、現在使われている頭がいわゆる獅子型であるのに対して、古い二組は竜頭型と呼ばれる角張った型をしている。

玉の内の獅子舞は「風祭獅子舞」と公称しており、氏神である三嶋神社へ例祭日八月十七日（近年はその日に近い第二土曜日に行っている。以前は七月十七日）に奉納している。呼称については、ほかに雨乞獅子とか悪魔除ともいっており、かつては、雨乞のため適宜の日にも奉納された。

平成二年には、日の出町の無形民俗文化財に指定されるとともに、平成二十九年には、戦後初めて獅子頭の大掛かりな修繕が行われ、弘化の獅子頭が甦った。



舞

は、七庭からなり、布団張、七道、花掛、竿掛、太刀掛、神切、神立である。また、

舞の諸役は、舞三名、花笠四名、天狗一名、笛数名、唄数名であるが、太刀掛に際しては、太刀使い二名が加わる。

例祭当日は、保寿院跡地にある玉の内会館を獅子宿とし、支度をした後、旧道を通って三嶋神社に向かう。行列は、万燈二基が先導し、ついで山車に乗った大太鼓と囃子方がつき、その後に獅子舞の諸役が並ぶ。三嶋神社で奉納した後は、玉の内上の屋敷地を舞庭として奉納し、夕刻、獅子宿に戻り、暫時休息した後、奉納する。

頭は、棒角の男獅子をオオダイ、女獅子をメジシ、捻れ角の男獅子をキリと呼んでいる。



三嶋神社(下庭場)



布団張 (ふとんばり)

神社奉納、檜原村より伝来、鎮守の社へ最初に奉納する舞なり。

七道 (しちどう)

宮参り、檜原村より伝来、宮参りの舞にして奉納の舞を行う。

(上庭場)



花掛 (はながかり)

花見の獅子、檜原村より伝来、桜で名高き吉野で花見に遊ぶ舞なり。

竿掛 (さおがかり)

悪病除、檜原村より伝来、歌に次の如きものあり。此の村は縦が十五里横七里、入場見とおけ、出場に迷うな。



花掛



竿掛

玉の内会館(中庭場)

太刀掛 (たちがかかり)

悪魔除、檜原村より伝来、一度魔に対すれば猛威をふるい、角の折れるのも恐れぬという風変わりな舞なり。

神切 (しんぎり)

五穀豊穡の祈り、当初より此の地に伝わるものにして、嵐、水災を除き、日照を祈る舞なり。



恵まれんとする場を女獅子の奪い合いに依って表す。二つの男獅子は、日神と雨神であり、女獅子は雲神に当たるなり。格闘数度にして日神が雨神を抑え、雲神を我が手に帰す。為に雲が晴れて、恵光が輝くという巧妙な舞なり。

神立 (かんだち)

雨乞の獅子、当初より此の地に伝わるものにして、早魃を除き、雨を祈る舞なり。農民の祈りである雨を全うせんとする場を女獅子の奪い合いに依って表す。雲神を奪わんとして格闘数度の後、力つきて日神が斃れ、雲神は雨神の手に帰す。為に慈雨となって農民を救うという勇壮な舞なり。